

<b>〔科目名〕</b> 人間の歴史	<b>〔単位数〕</b> 2単位	<b>〔科目区分〕</b> 教養科目
<b>〔担当者〕</b> 荷見 守義 Hasumi Moriyoshi	<b>〔オフィス・アワー〕</b> <b>時間:</b> メールでご調整の上、対応可能 <b>場所:</b> 講師控え室	<b>〔授業の方法〕</b> 講義
<b>〔科目の概要〕</b> 現代は難しい時代です。色々なことが急速に変化するし、ニュースで見聞きする出来事はとても複雑で、専門家であっても理解に苦しむことが多い昨今です。このような時代にどのようにつきあうべきなのでしょう。万能薬は多分なさそうで、みなさん一人一人が自分の頭で一生懸命考え、試行錯誤しながらやってみて行くしかなさそうです。歴史学はそのような時代について考える上で、有用なツールとなる学問です。この科目では、中国史を専門とする研究者として、みなさんに東ユーラシア史を材料として、現代を考えるヒントを、15回という極めて短い時間ですが、提供したいと考えます。		
<b>〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・「なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつかか〕</b> 歴史にはロマンがあるから好きという歴史ファン(歴女というのもそういう人々なのではないでしょうか?)は実にたくさんいますが、歴史学という学問の本質は、「比較的長い時間」、物事を観察するということです。一瞬では分からないことでも、ある程度、長く観察していると分かることは多いものです。この手法は「一定の傾向性を有する事象」の分析には、極めて有効な方法です。		
<b>〔科目の到達目標(最終目標・中間目標)〕</b> (最終目標) ・比較的長期の観察に基づいて、人間・社会・国家の事象に一定の傾向性があることを発見できるという歴史学の学問としての特質を理解し、身につけること (中間目標) ・歴史学は暗記ではなく、論理的に推理していく学問であることを理解すること ・自分と世界とを結びつけて考える思考法を身につけること		
<b>〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕</b> 授業の中で定期的にリアクションペーパーを使用して、みなさんの反応を確認しながら授業を進めます。		
<b>〔教科書〕</b> なし。毎回の授業時に資料を配付します。		
<b>〔指定図書〕</b> なし		
<b>〔参考書〕</b> 荷見守義 『永楽帝 明朝第二の創業者』山川世界史リブレット人 038(山川出版社、2016年)		
<b>〔前提科目〕</b> なし		
<b>〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等)</b> 下記の通り、平常評価・中間評価・期末評価を合算して、最終的な成績評価をおこないます(評価基準は次項参照)。 [平常評価] リアクションペーパー3回分 40% [中間評価] 中間レポート 30% [期末評価] 期末レポート 30% ・リアクションペーパーは 講義の主題について、分かったこと/興味を持ったこと/疑問に思ったこと・もっと知りたいと思ったこと、など自由に記述してください。事後の授業の中で参照してお答えします。 ・中間レポートは、講義前半の主題について、みなさんが考えたこと、調べて分かったことを文章にまとめて頂きます。 ・期末レポートは、講義全体をふまえて理解したこと、考えたことをまとめて頂きます。 目的は、 ①この講義を通して、歴史学という学問の特質をどれだけ認識したかを自らの文章でまとめること、そのことにより自身の学修の進展を確認すること ②このことにより、本科目の主題と学生各自の学修テーマとを結びつけ、さらなる成長を促すことの2点にあります。		

**〔評価の基準及びスケール〕**

○リアクションペーパーは記述量で、4段階評価をし、3 回分の平均点を評価とします。

- A(400 字以上)
- B(200～299 字)
- C(1～199 字)
- D(0字、未提出)

○レポートの評価基準は、中間・期末レポートともに、下記の基準で5段階評価し6倍します。なお、日本語が母語ではない留学生等は、文意の点については考慮します。

- 5:レポートテーマの要件を満たし、具体例を交えて自分なりの言葉で表現し、タイトルや構成も工夫している。
- 4:レポートテーマの要件を満たし、具体例を交えて自分なりの言葉で表現している。
- 3:レポートテーマの要件を満たし、自分なりの言葉で表現し、文意が通る。
- 2:レポートテーマの要件を満たしているが、文章が稚拙で、読むに堪えない。
- 1:レポートテーマの要件を満たさず、文章が稚拙で、読むに堪えない。

**〔教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望〕**

○講義形式ですが、定期的リアクションペーパーの提出を求め、みなさんの理解度を測定します。分からないことは放置せずに積極的に質問してください。みなさんの疑問や質問については、随時、授業に織り込みますので、何でも聞いてください。

○前回のプリントを見直すことがあるので、各回での配布物は毎回持ってきてください。

○受講のマナーを守ることができず周りの人の学習権を侵害する学生の履修は固くお断りします。

**〔実務経歴〕**

該当なし

**授業スケジュール**

第1回	テーマ(何を学ぶか): プロローグ～歴史学はどのような学問なのか～ 内 容: 講義全体を支える歴史学という学問の性格について説明するとともに、講義全体の組み立てや目的について概観し、本講義を通じて学ぶべきことについて提示します。 教科書・指定図書 なし。資料を配付します。
第2回	テーマ(何を学ぶか): 北緯 40 度の歴史学Ⅰ～青森から世界を見る～ 内 容: 青森県は生態環境上、歴史上、どのように位置づけられたらよいか、北緯 40 度を補助線として概観します。青森と世界の結びつけ方について提示します。 教科書・指定図書 なし。資料を配付します。
第3回	テーマ(何を学ぶか): 北緯 40 度の歴史学Ⅱ～環日本海域・環シナ海域と「四つの口論」～ 内 容: 世界を観察する視点として「海域の連鎖」について提示し、江戸時代の日本を環日本海域・環シナ海域に位置づけ、江戸時代の対外関係としての「四つの口論」について理解を深めます。世界の一部に組み込まれている日本という立ち位置について学びます。 教科書・指定図書 なし。資料を配付します。
第4回	テーマ(何を学ぶか): 北緯 40 度の歴史学Ⅲ～柳川一件・唐人町・俵物産品・北前船・島津氏～ 内 容: 「四つの口」を具体的な事件の分析を通じて肉付けします。北日本の歴史がどのように東ユーラシアと接続しているのか理解を深めます。 教科書・指定図書 なし。資料を配付します。
第5回	テーマ(何を学ぶか): 13 世紀世界システム 内 容: グローバル化の始まりを 13 世紀のモンゴルによる世界統治に求める議論が盛んになっています。モンゴルによる世界統治がグローバル化に与えた影響について考えていきます。現代を理解する上での重要な歴史上の分岐点について理解を深めます。 教科書・指定図書 なし。資料を配付します。
第6回	テーマ(何を学ぶか): 13 世紀世界システムと元寇・日本 内 容: 大河ドラマ「鎌倉殿の 13 人」に見る北条氏による鎌倉幕府支配ですが、執権北条時宗の時の元寇は 13 世紀世界システムではどのように位置づけられればよいのでしょうか、日本もこのシステムとは無縁ではなかったことを見て行きます。 教科書・指定図書 なし。資料を配付します。

第7回	<p>テーマ(何を学ぶか):14世紀の危機</p> <p>内容:モンゴル中心の世界(パクスモンゴリカ)は急激な寒冷化に伴う異常気象とパンデミックによって崩壊しました。明朝建国者である朱元璋の伝記史料を中心にその様相を見て行きます。現代的なトピックとなっているパンデミックについて、歴史の観点から見ていきます。</p> <p>教科書・指定図書 なし。資料を配付します。</p>
第8回	<p>テーマ(何を学ぶか):「14世紀の危機」とポストモンゴル</p> <p>内容:「13世紀世界システム」が崩壊した後、どのような世界ができあがったか、見て行きます。現代と歴史との結び付きについて学びます。</p> <p>教科書・指定図書 なし。資料を配付します。</p>
第9回	<p>テーマ(何を学ぶか):ポストモンゴル国家としての明朝の建国</p> <p>内容:東ユーラシア圏においては、モンゴルと明朝が対立する新たな「南北朝時代」を迎えるが、その特徴を永楽帝の親征を軸に理解していきます。歴史の構造把握法について学びます。</p> <p>教科書・指定図書 なし。資料を配付します。</p>
第10回	<p>テーマ(何を学ぶか):朱元璋の目指した明朝という国家</p> <p>内容:朱元璋が創造した国家には「14世紀の危機」を克服しようとした苦闘の跡が読み取ることができます。その実相を見て行きます。パンデミックが歴史上、何を引き起こしたのかを学びます。</p> <p>教科書・指定図書 なし。資料を配付します。</p>
第11回	<p>テーマ(何を学ぶか):倭寇と明朝による日本探査・日本地図</p> <p>内容:「14世紀の危機」におけるモンゴルの退潮は環シナ海域における勢力地図も書き換わりました。明朝は日本にスパイを放って最新状況の把握に努めますが、その様相を見て行きます。併せて、中国において作成された古地図の世界を見て行きます。歴史上の空間把握と人々の交流について学びます。</p> <p>教科書・指定図書 なし。資料を配付します。</p>
第12回	<p>テーマ(何を学ぶか):中華型外交と日本</p> <p>内容:中華王朝の外交体制を朝貢システムと呼びます。この外交体制の特質について永楽帝の外交姿勢・遣明船派遣を例に取って理解を深めます。中国の対外関係の歴史的背景について学びます。</p> <p>教科書・指定図書 なし。資料を配付します。</p>
第13回	<p>テーマ(何を学ぶか):東ユーラシア圏の貨幣史</p> <p>内容:デジタル貨幣なるものまで登場する現在ですが、「お金」の本質が失われたわけではありません。ポストモンゴルの国際貿易・国内取引を支えた貨幣の特質について学びます。現在の常識とは全く違う貨幣の姿について理解を深めることで、経済の本質的理解を促します。</p> <p>教科書・指定図書 なし。資料を配付します。</p>
第14回	<p>テーマ(何を学ぶか):皇帝専制支配とは</p> <p>内容:ポストモンゴルの中華世界では皇帝専制が強化されます。それでは、皇帝が勝手に何でも決められたのでしょうか。永楽政権における内閣制度の誕生と発展というできごとを通じて、皇帝専制の内実を探っていきます。現在もよく独裁という言葉が使われますが、独裁にはカラクリがあることを学びます。</p> <p>教科書・指定図書 なし。資料を配付します。</p>
第15回	<p>テーマ(何を学ぶか):歴史における救済とは何か?</p> <p>内容:ポストモンゴルは災害が多発する時代でした。中華の皇帝は被災者に対して救済を行いましたし、民間にも弱者救済の取組がありました。なぜ、被災者は救済されるのでしょうか。現代とは全く違う意味での救済の本質について理解を深めます。</p> <p>教科書・指定図書 なし。資料を配付します。</p>
試験	レポート課題の提出